



*Ojosama Paradise*  
**お嬢様  
パラダイス**

譲れないで女の純情!!

小説 高岡智空 挿絵 浅沼克明

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

第一章

乙女の園

006

第二章

生徒会室の乙女たち

057

第三章

誇り高き乙女

106

第四章

乙女の衝撃

147

第五章

乙女の純情！

198

## 登場人物紹介

Characters



しらかわみのりこ  
**白沢 穠子**

南条家に負けず劣らずの資産家の娘。上品なお嬢様だが、エッチや男の身体には興味津津。学園では生徒会長を務める。



なんじょう しずか  
**南条 静香**

日本有数の資産家の娘。ツグミのことは憎からず思っているが、素直に好意を伝えられず、ついワガママをぶつけてしまう。

よしの かおる  
**芳野 薫**

生徒会に所属する少女。おっとりとした話し方をする反面、実はかなりのDSで、男を悦ばせる術を心得ている。



もりさき  
**森崎 ツグミ**

まるっきり美少女にしか見えないような顔立ちの小柄な少年。幼い頃に両親を亡くし、幼馴染みの静香の家に引き取られる。

その魔乳の魔力とでも言うのだろうか、先ほどまでは抵抗の意思さえ見せていたツグミの理性は、いまや乳房で下半身を弄ばれたいという欲求に支配され、薫の命令にも簡単に従ってしまう。上側から覗く、豊満な乳肉の谷間を食い入るように見つめながらも、ツグミはキュッとスカートを摘んでそれをめくり上げ、鼓動を高鳴らせて薫の行為を待つ。

「うふふ、出てきました……いやらしく勃起させて、ドロドロに汚れたオチンチンが……可愛らしいショーツを持ち上げて、はしたなくヒクついていますよ……？」

クスクスと笑いを響かせる薫の言葉にカアッと頬を赤らめつつも、ツグミは動くことができない。その様子に満足げな笑みを浮かべると、令嬢は妖艶にささやく。

「よしよし、いいコです……それでは、たっぷりと可愛がつてあげましょうか」

薫は座ったままのツグミの膝へのし掛かるように擦り寄り、ブラに包まれたままの乳房を両の手で掬い上げると、その谷間を下から突き通させるようにして、そそり立つペニスの先端へゆっくりと沈めてゆく。

—— ニユルウ…… ニユプウ…… ツ

「んああつ……あ、か、薫お姉様あ……ふあああつっ！」

柔らかい肉の感触がシルク生地越しの亀頭に押し当てられ、ツグミは背中を大きくはね上げて、たまらず声高に薫の名を叫んだ。だがその叫びが終わらぬうちに、先ほど吐きだした精液を潤滑油にして、薫の豊乳が一気に肉幹を飲み込んでしまう。

——ジュルッ、グチュウウ……ニチュツ、ジュプウウ……。

「んひいっ、ひんっ……お、お姉様っ、は、入ってくっ……ううんっ！」

ヌルヌルとした自身の精液に捏ねられる感触とともに、温かい柔肉の中へペニスが埋まってゆくその快感は、まるで未経験の性交を想起させるかのように甘美で、全身が震えるほどの気持ちよさだった。ガクガクと腰が跳ね、それに連動するペニスが柔乳の間でムニムニと押し潰され、肉の奥へ吸い込まれているような感触だ。

「あはあっ、はうっ、んんうう……お、姉様、気持ちいいですっ、ああっ！」

左右から乳房を押し込んでペニスを締めつけたまま、薫は両手を交互にスライドさせつつ、上半身を揺すって激しく扱き上げてくる。まるでいくつも手に包まれて扱かれていくかのような性感の波に、ツグミははしたなくも声を荒げ、快感を訴える。

「うふふ、素直なコですね。自分の射精した精液が、ニルニルと絡みついてるのにそんなによがって……恥ずかしくないんですか？ 女の子の格好なんてして、女学園の女子トイレでオチンチン弄られて、そんな甘えた声で喘ぐだなんて……変態さんですね」

クスクスと嘲笑われ、いやらしい言葉で責められているというのに、不思議と拒絶しようという感情が湧き起こらない。反骨の心を生みださないほどに薫の乳房による愛撫が優しく、なによりも丁寧で慈しみを与えてくれるからである。

（はあっ、んっ！ は、恥ずかしいけどお……お姉様の動き、優しいよお……っ！）

もつと心地よい刺激が欲しいとばかりに腰を動かし、吸いついてくる乳房にペニスを押しつけると、乳谷間をニユルリと滑り抜けて先端が頭をだした。その動きを咎めることもなく薫は優しく微笑むと、谷間から突きだした亀頭に吸いつき、艶かしく光る唇で強烈な口づけを浴びせながら、チュウチュウと吸い上げる。その温かくヌルついた感触にツグミはビクンツと腰をはね上げ、ストローのように吸われる快感に嬌声をもらす。

「んふふふ……ちゅうっ、じゅるう……じゅぶっ、んちゅう、ちゅっ……ちゅぱあ……」  
「ふわああっ！ あんっ、んっ……はあっ、さ、先っぽがあ……んいっ！」

亀頭が生温かい口内に包まれ、チロチロと舌尖でくすぐられると瞬く間に腰が砕け、爪先までをピンと張りつめて全身が硬直させられる。精液を吸い上げられるのに合わせて敏感な粘膜が擦られ、それでいて肉幹は柔乳に包まれて捏ね回される。肉棒は完全に快感の坩堝に取り込まれ、根元からマグマに煮詰められたかのように熱く火照り、トロトロに蕩けてしまつて力が入らない。

「んじゅっ、じゅるう……ふあっ、はああ……ツグミさんの精液、とつても濃厚ですよ。苦くて青臭くつて……殿方の欲望をすべて詰め込んだみたいのに、いやらしい味ですね」

「はうっ、んっ……お姉様、言わないで、ください……ふやあっ！」

味の評価をしつつも薫の手の動きは止まることなく、精液と交換するように垂れ流された唾液がペニスに絡みつき、乳房がギュウギュウと圧迫してくる。搾精器のように吸いつ



き、根元から扱き上げてくる柔らかな感触に腰が浮かび上がり、背筋がゾクゾクと痺れてしまう。唾液に塗れた亀頭は真っ赤に染まって膨れ上がり、乳房に負けず劣らず柔らかな唇が幾度となく擦りつけられると、欲望のこらえなどこれっぽっちもきかなくなる。

「んあああつつ！ それっ、やつ、ダメエツ……気持ち、いいっ、んうっ！」

プチュ、ジュプツと淫らな水音を響かせて亀頭に口づけられ、今度は吸い上げられるのではなく、たっぷりの唾液を絡めて舌全体でディープキスするように舐めしゃぶられる。乳房のスライドに合わせて乳肉に包まれ、解放されては舌で蕩かされ、裏筋がくすぐられる夢のような快感——それはツグミのはしたないおねだりを引きだすのに、そう時間はかからなかった。

「ふあっ、あんっ……お、お姉様あ、ああつつ！ イ、イカせてっ、くださいいいっ！」

ビクンビクンッと背中が跳ね、腰が激しくくねって絶頂の近づきを訴える。先ほど一度目の絶頂を迎えたばかりではあるのだが、度重なる薫の言葉責めと淫らな奉仕姿、それに加えて下半身が蕩けるほどの快感を送り込まれると、我慢などできなくなってしまう。

「あら、早漏さんですねえ……ふふ、いいですよ。いけない男の子のエッチなお汁……私の胸でビュクビュクッて、思いっきり射精してください……」

ツグミの情けない訴えに瞳を細めると、薫の手がラストスパートだと言わんばかりに激しく動かされ、乳房をタップンタップンと躍らせながら肉棒全体に押しつけ、扱き上げてくる。



尿道の奥深くで熟成され、グツグツと煮えたぎっていた欲望の塊がその動きに合わせて、一気に解放されるように駆け上がってくるのがはつきりと感じられた。

「やああつ、ダメツ、んうううつ！ 出るつ、出ちゃうつ、イキますつ！ ふあああつ！」

——ビュルビュルビュルウウツ！ ビュクツ、ドクド。ピュウツ！

年上の美少女に優しく促されるまま、ツグミは本日二度目の射精を盛大に吐きだしてしまふ。ガクガクと腰が震え、乳圧に押し込まれるような絶頂の波がペニスを痺れさせ、一度目と変わらないくらい多量の精液が尿道を駆け上がり、ドクドクツと薫の温かい口内へ注ぎ込まれる。龟头を甘噛みされる感覚さえも快感に変換され、ツグミの大きく丸いつぶらな瞳がトロロンと曇り、だらしなく唇が半開きになっていた。

「はふうう……お、お姉様あ、はぐつ、んつ……き、気持ちいいですう……ふあつ！」

トイレの蓋にもたれかかる格好で完全に背中を預けたツグミは、その弛緩した全身をピクンピクンと震えさせ、絶頂を迎えた少女のように動けなくなる。それでも、最後の一滴までを搾り取らんとしようというように薫の豊乳がネットリと絡みつき、その感触に吸い上げられて尿道の奥に残った残滓がピュルツと飛びだし、快感中枢をくすぐった。

それから二度三度と擦り上げ、それ以上出ないことを確認したところで、ようやく薫の手が乳房から離され、萎えたペニスと谷間から引き抜かれてゆく。

「んっ……はああ、こんなにも射精するだなんて、よほど気持ちよかったようですね？」

「では、わたくしの下着で擦ってあげましょうか……それとも……」

ツグミの胴を跨ぐように立った穢子の、シヨーツを手放した指先がスカートを摘み上げ、薄い恥毛に覆われた秘部をツグミの眼前に晒す。

「こちらで……ふふ、擦って差し上げましょうか？」

もう片方の手が濡れた恥毛を掻き分け、陰唇に宛てがわれた指がネットオ……と粘液の糸を引き、淫口を開かせる。その光景はむしゃぶりつきたくなるほどに淫靡で、ほのかに漂う牝の香りが、ツグミの牡を誘惑して痛いほどに刺激する。

(こ、これが……お姉様の、アソコ……んくつ)

おそらく他人に触れられたことなどないであろう、美しいサーモンピンクの粘膜襞が花弁のように幾重にも折り重なり、ヒクヒクと震えながら手招きしているようだ。生まれて初めて目にする女性の秘口は、奥から溢れ出た多量の女蜜でしとどに濡れそぼち、いやらしい光を放ってツグミの視線を釘づけにさせる。

(すぐく、綺麗だ……アソコに、オチンチンが入っちゃうなんて……ウソみたい……)

あのととき——初体験を迎えたときには、ほとんど拝むことはできなかった女性器は、こうして目の当たりにするととても神秘的で、神聖なものに感じられる。薫にも同じものがあり、そこに自分のペニスを入れたなど、いまでも信じられないほどだ。

「ほおら、こんな感触ですよ……耐えられるかしら？」

「え……ふああつ、んっ、んひいつつ！」

腰を落とした穢子の陰唇はペニスを挟み込む格好になり、ヌチュリ……と粘膜の温かさを伝えて、肌を吸いついてくる。薫の膣に包まれた感触とも異なる、肉幹を根元から啜り上げ、扱くように蠢く甘美な感触に下半身が蕩け、ツグミは悲鳴のような喘ぎをもらす。

「んっ、はああ……可愛らしい反応ですこと。では……ふっ、んう……こちらも、こうして擦ってあげたらどうなるのかしら……ほおら……シュッ、シュッ……」

「あひいつ！ あんっ、んひいつつ！」

うっすらと牝蜜の染み込んだ白いショートツで亀頭が包まれ、ボトルキャップを捻るような手つきで捏ね回される。肉幹を陰唇で丁寧にしやぶられ、柔らかなシルクで亀頭を擦られる快感にガクガクと腰が跳ね、狂おしいほどの官能が全身に這い上がってくる。

「ああ、もうっ……可愛らしい声ですね。そんな声で啼かれては、私も我慢できなくなっ  
てしまいます……ふっ、んあっ……」

頬を赤く染めた薫はまたもツグミの腕に跨がって指を陰唇に誘い、壺洗いをしながらクリトリスを弄り始める。体操着をまくり上げ、露わにした乳房を片手で優しく弄りながら、ツグミに顔を近づけて濃厚な口づけを浴びせ、あるいは耳朶に唾液を絡ませてくる。

淫肉に包まれた指先や肉幹、唾液に塗れて舌に擦られる耳や唇、そして柔らかなショートツ越しに手の平で捏ね回される敏感な亀頭——身体中に押し寄せる快感の波に溺れさせら

れ、ツグミは舌を突きだして涎を撒き散らし、声高に訴えかける。

「ひいいんっ、んやっ、やああつ！ お、お姉様っ、イクッ、イクウウ……き、気持ちよすぎますっ、こんなっ……ひやうっ、ふううんっ！」

ピクンピクンと腰をはね上げ、涙を浮かべた上目遣いで穢子を見つめると、令嬢の清楚な唇が妖しく歪められた。そして徐に腰を上げたかと思うと、龟头からもショーツが取り払われ、先走り汁がツウ……と長い粘糸を引いて床を汚す。

「あら、いけませんわ……まだわたくしの大事な部分を、味わっていないでしよう？」

「ひうっ、お、お姉さ、ま……なに……んあつ！」

チョン、と美しい指先で龟头の鈴口を突かれ、ツグミは腰をくねらせて身悶えてしまう。それを嗜虐的な、けれど慈しむような瞳で見下ろしながら、穢子は己の陰部を指で開き、ペニスの先端にヌチュリ……と口づけさせた。粘膜同士の擦れ合う感触に、電流を受けたような快感がビリッと身体を突き抜ける。

「さ、ご覧なさい……ツグミくんはいやらしいオチンチンが、わたくしの膣内に入るところを……はあっ、んっ……んくっ、うう……いっ——」

「そんなっ……ダメですっ、お姉様っ……ふわあああつっ！」

とつさに制止の言葉をかけようとするも、穢子は苦しげな吐息をこぼしながらゆっくりと腰を沈め、ズブズブと肉棒を啜え込んでしまう。プツッ……と微かな引っ掛かりを突破

し、温かく絡みつく柔肉の奥深くへ誘われ、ツグミは声にならない嬌声を迸らせた。

「あうっ、んんうう……お、お姉様っ、どうしてえ……うくっ、はああ……」

薫の膣内のように強く締めつけるわけでも、絡みついてくるわけでもないが、その生温かくて柔らかい淫肉はクチュクチュといやらしく動き、硬くそり立ったツグミのペニスを探みほぐしてくる。ただ挿入しているだけだというのに龟头からカリ首、そして肉幹が根元に向けて膣粘膜で優しく包み込まれ、溢れる牝蜜でコーティングされる。トロトロの粘膜は牡棒へ強烈に吸いつき、そこから這い上がる快感に背中が震える。

だが、卑猥に濡れ光る結合部からは赤い滴が垂れ落ちており、このような形で捨てるべきでない純潔を自分が奪ってしまったことを、ツグミは瞬時に理解した。

「どう、してえ……お姉様、僕なんか、にい……」

すぐにでも絶頂してしまいそうなのを懸命にこらえ、ツグミは掠れた声で穣子に問いかける。すると苦悶に眉根を歪めながら、穣子が真剣な眼差しを向けて答えた。

「どうして……ふふ、か、簡単なことではありませんの……一つは、んっ、今朝のお礼……もう一つ、は……あうっ、ん……ツグミくんのことを気に入ったから、ですわ……」

「え……」

突然の告白に目を丸くしていると、穣子が口端に笑みを湛えて続ける。

「あれだけ、恥ずかしい目に……あつ、遭わされれば……できるだけ関わりたくないと思

うのが、普通ですのに……貴方ときたら、避けるどころか手伝おうとまでするんですもの。その従順な性格を……わたくし、すっかり気に入ってしまったのですわ」

幾分か痛みが和らいだようで、自然な笑みを浮かべたまま穣子は上体を倒し、ツグミに吐息がかかるほどの距離に顔を近づけると、言い聞かせるようにささやきを口にする。

「そして……気に入ったものは、どのような手段を用いてもモノにする……それが白沢家の教え……その教えに倣い、わたくしは貴方を虜にする……そう決めたのですわ」

「そ、んなあ……はうっ、ひはああっ！」

そう言い終えた刹那——穣子が下腹部にキュッと力を込め、柔らかな膣肉で肉幹をびったりと包み込んでくる。油断していたところに加えられた強烈な快感に、ツグミは腰を浮き上がらせて脚をくねらせ、女の子のように喘ぎを叫んでしまう。

「ああんっつ！ んあっ、お、姉様……そんなに、締めちゃ……はうんっ、んうっ、射精、しちゃうう……あっ、あああっ！」

「んっ……気持ち、いいんですのね？ わたくしは幼い頃から、乗馬やバレエを嗜んでいましたから、はあっ、んう……こうして、締めつけるのは得意ですよ。ほおら、あっ、あんっ……ふふっ、いかがかしら？」

穣子の言うように、先ほどまでの優しい包み方とはまるで違う、ペニスを肉壁でがんにがらめにして扱き上げ、陰囊に溜まった精液を搾り取るうとするような膣圧が押し寄せる。

それも常にではなく、締めつけと緩みの波をキュッキュツとリズムカルに繰り返し、肉幹を根元から扱きながら全体をくまなく揉み込み、蕩けるような快感を流し込んでくる。

「ひうつ、いつ、はああ……イクツ、お姉様つ、イクウウツ！ んうつ、んうつ！」

これほどの快感に抗うことなどできるわけもなく、ツグミは理性を奪われたように夢中になつて、穢子突き上げようと拙く腰を振る。だが――。

「え――な、なんでえ、どうしてえ……もうイク、のにい……もうすぐ、なのにつ……」

いったいどのような力がかかっているのか、あれほど軽く感じた穢子の身体が急に重みを増し、腰を動かさなくなってしまう。それと同時に穢子も腰の動きを止め、ツグミは肉棒を臍肉に握られたまま、その緩やかな快感だけを焦らすように送り込まれていた。心地よくも上り詰めることのできない快感は、狂おしいほどに心と身体を責め苛んでくる。

「ふふ、いかがかしら……合気の応用で体重のかけ方を変えましたから、動けないのではなくて？ これで……んつ、はああ……ツグミくんは、わたくしの許しなしにイクことは、実質不可能となりましたわ、うふふ……」

キラリと猫のように瞳を輝かせ、畏にかかった獲物を見つめる美しき令嬢は、そう言つて嗜虐的な笑みを浮かべた。

（や、やだつ、そんなあ……イキたい、イキたいよおっつ！）

足で弄られ、素股とショーツで擦られ、それでもお預けにされていた絶頂をようやく迎

えられると思つたところで、またもや寸止めされてしまい、もはや頭の中には射精のことしかない。それなのに自分では快感を食ふことができず、頭が焼き切れてしまいそうなほどの焦燥感に駆られ、ガクガクと下半身が震える。

「お、お願い、お姉様あ……っ、うう……はああ……」

涙を浮かべた瞳で穢子を見つめると、次第に快感の波が遠のいてゆき、どうにか気持ちにも余裕が生まれる。だが、落ち着いたような表情からそのことを読み取られたのか、穢子は唇を笑ませてまたも腰を前後に、そして上下に揺すり立て、肉棒を抜いてくる。

「はあんっ、んっふうう……んくっ、くああ……ふふっ、んうっ、んん……」

——ジュプッ、グチュッ、ジュブンッ！ ニチュウ……ニチュッ、ジュボオッ……。「あひいんっ、ふあっ、ああんっ！ イクッ、イクウッ！ ああっ……」

けれどやはり——絶頂の寸前、陰囊がキュッと引き上がり、亀頭の先が震えて射精の前兆を見せると穢子は動きを止め、ヌルヌルと光る陰唇をツグミの腰に押しつけるようにして、泣きそうになったこちらの顔を見下ろしてくる。

「イキたいんですの？ どのような気持ちなのかしら、イキたくてもイケない男の子の気持ちというのは……ふふ、ほおら、泣いていないで聞かせてくださいませんか？ どうしたいのか、どこになにをなさりたいのか……ツグミくんの、その可愛らしいお口から」

言いながら穢子の指が制服の上からツグミの乳首を突き、軽く捏ね回してくる。その痺



れるような感覚にゾクゾクッと背中を震えさせ、ツグミは恥も外聞もなく叫んでいた。

「おっ、お願いしますっ！ 穠子お姉様っ、イカせてっ……射精させてくださいっ！ 穠子お姉様の、オマ○コにい……せ、精液い、注がせて、くださいっ……」

己の欲求に従属させられたような、浅ましく最低なおねだりを口にし、羞恥で顔が真っ赤に染め上げられる。けれど穠子はそのセリフを引きずりだしたことで興奮を高めたように、うっとりとした細めた瞳でツグミを見下ろし、口を開く。

「まあ、わたくしの膣内に射精したいだなんて……ふふ、大胆ですよのねえ。でしたら、一つだけ誓っていたきたいことがありますわ……」

もったいぶるように唇を舐め、金髪令嬢が続きを告げる。

「これからの貴方は、わたくしのモノ……学内ではわたくしの指示に絶対服従し、痴態を晒してわたくしの目を楽しませるのですわ。それが約束できれば……ふふ、すぐにでも、射精を許しますわよ。この奥にたあつぷりと溜まった、ドロドロのザーメンを……」

「そ、そんな……あひっ、ひいっ……」

モニュモニュと後ろ手に陰囊を突かれ、肉棒がビクリと跳ね上がり、膣壁を打ちつける。「あんっ、ん……わたくしの、膣内へ……ね？」

聞かされたのはあまりに恥辱的な約束の内容、けれども目の前にぶら下げられたのは、砂漠の水にも相当するような対価。受け入れることはあまりにも屈辱——だが、肉棒は

激しく脈動を繰り返しており、射精の止められている根元がジクジクと鈍い痛みを発し、下半身を刺激してくる。焦燥感に理性が焼き焦がされ、喉がカラカラだった。

(あぐつ、うううつ、もうつ、射精つ……したいよおっ！)

甘美で蠱惑的な誘惑の手にツグミは抗うことも忘れ、腰を震えさせて叫び答える。

「わ、わかりましたっ……お姉様の言うコト、なんでも……聞きますからっ……どうか、しゃ……射精させてくださいいいっ！ ザーメンツ、ビュルビュルさせてええっつ！」

そう言い放った瞬間——満面の笑みを浮かべた穢子はチュツと音高くツグミに口づけ、そして瞳を見合わせて告げた。

「契約成立ですわ……ふふ、構いません。存分に射精なさいっ……わたくしのツグミ！」

——グプッ、グプジュウツ！ ニュチュウツ、ジュツプ……ジュプウツ！

括約筋を締めつけ、肉棒を隙間なくぴったりと膣肉で覆い尽くし、穢子は暴れ馬にでも乗っているかと思うほどに激しく腰を振り、尻肉をツグミに叩きつけてペニスを扱きだす。その途端、会陰部からゾゾッと寒気が這い上がり、それと同時にせき止められていた快感の波が一気に押し寄せ、尿道を割り開いてせり上がってくる。

「いひゃああっつ！ あひつ、ひんつ、イクツ、イクイクイクウウツ！」

頭を振り乱し、ガクガクと下半身を痙攣させてツグミが叫ぶ。

「い、いいですわよつ、んうつ、はああ……す、好きな、ときにい……あひんつ、はあつ、

お……おイキなさい、ツグミイッ！ んあつ、はああんっ！」

爆発寸前まで膨らんだ肉棒が膣壁を擦り上げる快感に、穢子も上品な令嬢にあるまじき喘ぎをこぼして叫ぶ。ツグミの手の平で自慰に耽る薫も、二人の痴態に触発されたように指先で淫肉を掻き回し、自身の手で形が潰れるほどに激しく乳房を揉みしだく。

「ふああっ！ んいっ、いいっ、ですよお……ツグミさんの、指先、優しくて……温か、いいいっ！ んはっ、あああつ……んううっ！」

（穢子、お姉様……薫お姉様あ、僕……んうっ、ふやああ……）

女壺の奥から溢れる甘露を肉棒と指先にたっぷりと浴びせられ、室内にも漂う牝の香りにツグミは溺れさせられる。全身の力が抜け、頭には桃色の霧が満ち、込み上げる快感に身を委ねてツグミは、溜まりに溜まった濃厚な欲望を解放した。

「で、でま、すう……んうっ、ふううんっ……ひあつ」

——ビュルビュルルッ！ ビクビクビクッ、ドブッ、ドプウウッ！

叫ぶこともできないほどの圧倒的な快感が下半身を突き抜け、尿道を開き、陰囊の奥から吐きだされる。絡みつく柔肉に揉みほぐされた肉幹は、まるでポンプのように身体の奥から精液を汲みだして、先端をピタリと押しつけた穢子の子宮口へ叩きつけてゆく。

「はぎっ、あつ、はああ……気持ち、いいよお……ひんっ、ひあああ……」

ガクガクッと腰が跳ね、大量の熱い迸りを注ぎ込むと、それに合わせて穢子も全身を震

わせ、快感に蕩けた声を訴えもらす。

「はあつ、あああつ、熱いつ、熱いですわつつ！ くふうつ……わ、わたくしもお……んううつ！ あつ、イクツ、イキますわつ……ふうんつ、んんううつつ！」

顔を上向かせて唇を噛み締め、無様な顔を晒すまいとこらえるように、穢子も甘い声を細く吐きもらして絶頂を迎える。しなやかな身体を仰け反らせ、微かな痙攣を何度も繰り返し、さらなる射精をねだるように膣肉がギチギチと肉棒を締めつける。あの上品で誇り高い穢子が見せる艶姿は、なにも勝る妖艶さと美しさ、そして可愛らしさだった。

「はあつ、あああんつつ！ ツグミ、さあんつ！ あんつ、んつ、ふあつ、はあんつ！」  
対照的に、薫は大きく口を開いて快感を訴え、膣肉と全身を震わせて激しい絶頂を迎える。陰唇からはその盛大な絶頂を知らせるようにブシューウツ！ と凄まじい勢いで牝蜜が噴きだし、ツグミの手の平をドロドロに濡らし染めていった。

「はあつ、ああ……んつ、ふああ……」

三度、四度、五度……と射精を繰り返し、ようやくすべてをだし終えたツグミは荒い息をついて、仰向けのままヒクヒクと全身を躍動させる。しばらく休まないと指一本動かさそうにない、そんな心地よい疲労感が下腹部を中心に広がっていた。その身体の上へ、同じように脱力しきった二人の令嬢が上半身をもたれかけさせ、甘い声でささやいてくる。

「ふふ、これで貴方はわたくしのモノ……もしも約束を違えたなら、許しませんわよ？」



「はうっ、んあっ、静香ちゃん、大好きっ……静香ちゃん……っ！」

腰をくねらせ、膣道に円を描くような動きで膣壁を掻き回し、肉傘で粘膜をこそぎながらゆつくりとペニスを引き抜いていく。喪失感にブルッと静香の膣内が切なげに蠢くと、それを慰めるように勢いよく腰を叩きつけ、子宮口までを一気に抉り貫く。硬く熱い肉塊が押し込まれるたびに、溢れだした蜜液はビュルビュルと飛んで静香の尻肉から太ももをベットリと濡らし、ツグミの腰にまでその飛沫を散らしていった。

「ツグ、ミい……ツグミっ、ツグミいっつ！ あひっ、ひああんっつ！ ア、アタシもっ、アタシもおおっ！ 好きっ、大好きいっつ！」

ツグミの腰の動きに合わせて尻を振りながら、静香も喘ぎを混じらせて声高に叫ぶ。互いを想い合う気持ちに肉体の感度は飛躍的に膨れ上がり、擦れ合う粘膜からは凄まじい快感電流が迸り、脊髄を駆けて脳へ突き抜け、全身を痺れさせて止まない。

「ツグミさんっ……私もっ、私も大好きですっ、愛していますっつ！ あふっ、ふやああ……あんっ、あああっつ！ お、お慕いしていますっ、ツグミさあんっつ！」

「はむっ、んちゅう……わ、わたくしもっ、はうっ、んふうっ……愛していますわっ、ツグミのこと……好きっ、好きで、たまりませんのっ、ああっ、はああんっ！」

両サイドから腕に絡みつき、乳房や唇、柔らかな肌を押しつけてくる二人も、静香に負けじと告白を重ね、その証とばかりに熱烈な愛撫を繰り返してくる。

「ふわっ、あぁっ、じゅぱっ、ちゆる……ぼ、僕もお……はうっ、あんっ！ おっ、お姉様方のこと、好き、ですう……んうっ、あああ……」

稗子にキスを返し、薫の耳朶に舌を這わせ、一人の愛情に誠意を込めて応えるツグミ。誰が一番好きなのかは言うまでもない、けれど自分をここまで愛してくれて、可愛がつてくれた二人のことも大好きなのだ。その想いを込めて指先を蠢かせ、激しい水音を響かせながら、令嬢たちの秘部を抉り、膣肉をクチュクチュと掻き捏ねる。

——グチュッ、ニユプッ、ジュプッ……ジユクッ、ニチュウッ……。

「ツ、ツグミさん……んはぁっ、あんっ、ああぁっ！」

「あっ、ああ……そんな風に、言われてはっ……わ、わたくしい……ひゃうんっ！」

感極まったかのように大きく身を震わせ、女壺で唾え込んだツグミの指を、嘔み千切らんばかりにギユウウツと締めつけ、膣肉を痙攣させた。

（あっ、お二人とも、イキそうになつて……んくっ、うううんっ！）

二人の絶頂の予兆を察知したツグミは、一つの想いのためにだけひたすら腰を振って、静香の膣内に肉棒を打ち込み続ける。

（な、なんとかつ……みんなで一緒に、イキたいよおっ……）

大好きな三人の少女——そんな彼女たちが仲違いする姿など見たくはない。

元々からして不仲だった、それはたしかにそうかもしれない。けれど自分が関わったこ

とよつてその不仲に拍車がかかったというなら、自分がいるときくらいは仲良くなつてくれれば……そんな思いが、ツグミの心の奥には息づいていた。もちろん、このくらいのことでは急に仲が良くなつたりはしないだろうけど、仲違いをしていた少女たちが同じタイミングでイクことができれば、それは一つのきっかけになるかもしれないのだ。

「はあつ、はあつ……静香ちゃんつ、もつとたくさん……僕のこと、感じてえつ！」

腰をピタリと押しつけたまま、グイグイと子宮口へ亀頭を捻じ込込むようにして肉棒を擦りつける。ザラザラとした膣道の最奥、その周辺をくまなく突き回し、肉傘で挟んでゆくと、静香の腰がビクンッと痙攣して跳ね上がった。

「んくあああつっ！ いいつ、はああんつ！ ツグミい、いいよおつ……すごく、感じてるの……気持ちいいのっつ！ ああつ、へ、変になつちゃううつ、ひいりんつ！」

明らかに上擦った声音で、あられもない激しい嬌声を喉奥から迸らせた静香の身体中から、多量の汗が噴きだしてブラウスを肌張りつかせてゆく。先ほどまで以上の快感をえているのだと感じたツグミは、短いストロークを何度も繰り返し、ひたすら子宮口を突き上げて、その部分ばかりを刺激する。

——グプッ、ニチュウツ、ジユプンツ！ ヌプッ、パンツ、ズパンツ！

「ひはああつ、ああつつ！ ツ、グミつ、んああつ！ なにっ、これっ、はああんつ！」  
初めて感じる絶頂の波に静香が戸惑った声を上げる。ツグミは不安を与えないようにと



穏やかな声で、最大限の慈しみと<sup>いたわ</sup>り、そして愛情を込めて言葉返す。

「大丈夫だよ！ 大丈夫だから……そのまま、身を任せてっつ！ イッて！」

「んううっ、はあぁ……こ、これっ、イクウ……？ これ、があ……イク、つて、こと……ひゃふううっつ！ あんっ、あつ、ダメっ、イクッ、イクウウッ！」

ツグミの声を聞いて安堵した静香の身体が、小刻みな痙攣を繰り返して大きく背中をはね上げた。その瞬間、狭く絡みついていた膣肉全体が一気に収縮して締めつけられ、尿道の奥からすべてを吸い上げられてしまうような感覚が、下半身を包み込んだ。

「ふぁあっ、あつ……イクウッ！ イクイクッ、イッちやうっ、んっ、んぁあっつ！」

括約筋が締まり、尿道が広がって、身体の奥に溜め込まれた欲望の塊が解放されてゆくのが感じられる。けれど、このまま自分だけがイクわけにはいかない。膣に潜り込ませた指を大きく開かせ、親指で陰核を軽く押し捏ねるようにして刺激を送り込み、二人の令嬢に絶頂への架け橋を渡そうとする。それと同時に、静香の女壺を貫いていた肉棒を一気に引き抜いて、膣口までの肉襲をくまなくこそぎ、そして――。

——ズップウウッ！ ニチユグウウッ、ジュブッ……ジュブウウウッ！

「ひつきいいいっつ!? いはっ、ひはあぁっつっ！」

肉傘に引っ搔かれて反り返った媚粘膜を、もう一度押し込んだ肉棒によって、荒れた地面をならすように捏ね潰してゆく。刹那――。

「あんっ、ああっ、ツグミさんっ、ツグミさああんっ！ ひうっ、ひああああんっ！」  
「ふやああっ！ ダメッ……イクッ、イッてしまいますわっ……ああっ、ひううっ！」  
「あくっ、くやああっ、好きっ、しゆきいいっ！ ツグミっ、大好きいいっ！ あくっ、  
んふうっ、んあああっ、イクウウッ！」

三者三様に絶頂を訴えて啼き叫び、全身を大きくはね上げてツグミに身を擦り寄せた。美少女三人に挟まれて愛されるその悦びを嘯み締め、堪能し、ツグミは自身も身体を震わせて、大きく叫び上げる。

「はううんんっ！ ぼ、僕もお……僕も、あううっ！ ああんっ、イクウウッ！」

——ビクビクビクッ、ビュルルッ！ ビュルッ、ドクドクッ！

ギチギチと締めつけられる肉棒が大きく膨らみ、鈴口が快感に打ち震えて緩み、奥底から飛び出した白濁が静香の子宮口へ勢いよく注がれてゆく。と——。

——プシャアアアッ！ ブシユッ、ブシユシユッ！

美少女たちの淫壺からも透明な飛沫が迸り、噴水のように弾けてツグミの身体を濡れ汚してゆく。温かな淫液をかけられながら、尿道を駆け上がる射精の快感に酔いしれ、陰囊に詰まったすべてを注ぎ込もうというかのように、ツグミは腰を揺すりながら全身を躍動させて精液を放ち続ける。

（はふっ、ひゅううん……しゆ、しゆごお、いい……すぐく、気持ち、いいよお……）



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**